

たい
かっぱの太ちゃん

さく 山形 三吉 え コンタ・ゆうじ/たかはし よしひで



かっぱの太ちゃん

さく 山形 三吉 え コンタ・ゆうじ/たかはし よしひで



いちい書房

二〇一一年三月一日、つぼんの東北地方に大きな地震がありました。

一〇〇〇年に一度、といわれるほどの巨大津波が襲い、たくさんの方が亡くなりました。行方不明になった人もおおいいます。

東北地方の中心都市・仙台市も甚大な被害を受けました。ここ仙台市泉区泉中央にある「三好耳鼻咽喉科クリニック」も、建物自体はなんとか無事でしたが、内部は診療室も事務室もめちゃくちゃになってしまいました。





一通の手紙

三好耳鼻咽喉科クリニックの皆さんが、
一〇日間近くもかかってようやくやくくり
ニックの内部を整理し終え、診察を開始
しようとしたそのとき、一通の速達郵便
が届きました。郵便屋さんの話では、地
震のあとで扱う最初の手紙ということ
でした。
それは、東京都目黒区に住む北野太造
さんからの手紙でした。
手紙にはこう書かれていました。



心配です。心配しています。
三好先生、ご無事でしようね。
ご無事を祈っています。
祈っています。
祈っています。

「三好先生、お元気でしょうか。父も
母もなんと電話しても通じないと言いま
す。ぼくもなんどもなんどもメールしま
したが、まったく通じません。
心配です。心配しています。三好先生、
ご無事でしようね。ご無事を祈っていま
す。祈っています。祈っています。」



東京・愛育病院
あいくびょういん

その年から二七年前の一九八四年
一月二四日、東京都港区の「愛育
病院」で、一人の赤ちゃんが誕生し
ました。まるまると太った元気な赤
ちゃん、おとうさんとおかあさん
の北野^{きたの}さん夫妻^{ふさい}にとっては、はじめ
での赤ちゃんでした。

赤ちゃんは、太造^{たぞう}ちゃん^{ちん}と名付け
られました。北野^{きたの}太造^{たいぞう}、太ちゃん^{たい}、
いい名前ですわねえ。



青い眼の赤ちゃん

太ちゃんはおかあさんのおっぱいをたくさん飲んで、元気に育ちました。

おとうさんとおかあさんは、太ちゃんの将来に思いを馳せ、それぞれに大きな夢を描いては二人で語り合いました。毎日が楽しく、希望に燃え、胸が膨らむ日々がつづくのでした。

ところが、ある日、二人は太ちゃんの眼が異様に青いのに気がつきました。

はじめはかわいい青い眼だと思っていたのですが、でも、青すぎるのです。かわいい、を通りこしている青い眼なのでした。

そしてまた、太ちゃんの髪の毛の一部が変に白いのにも、二人は気がついたのでした。

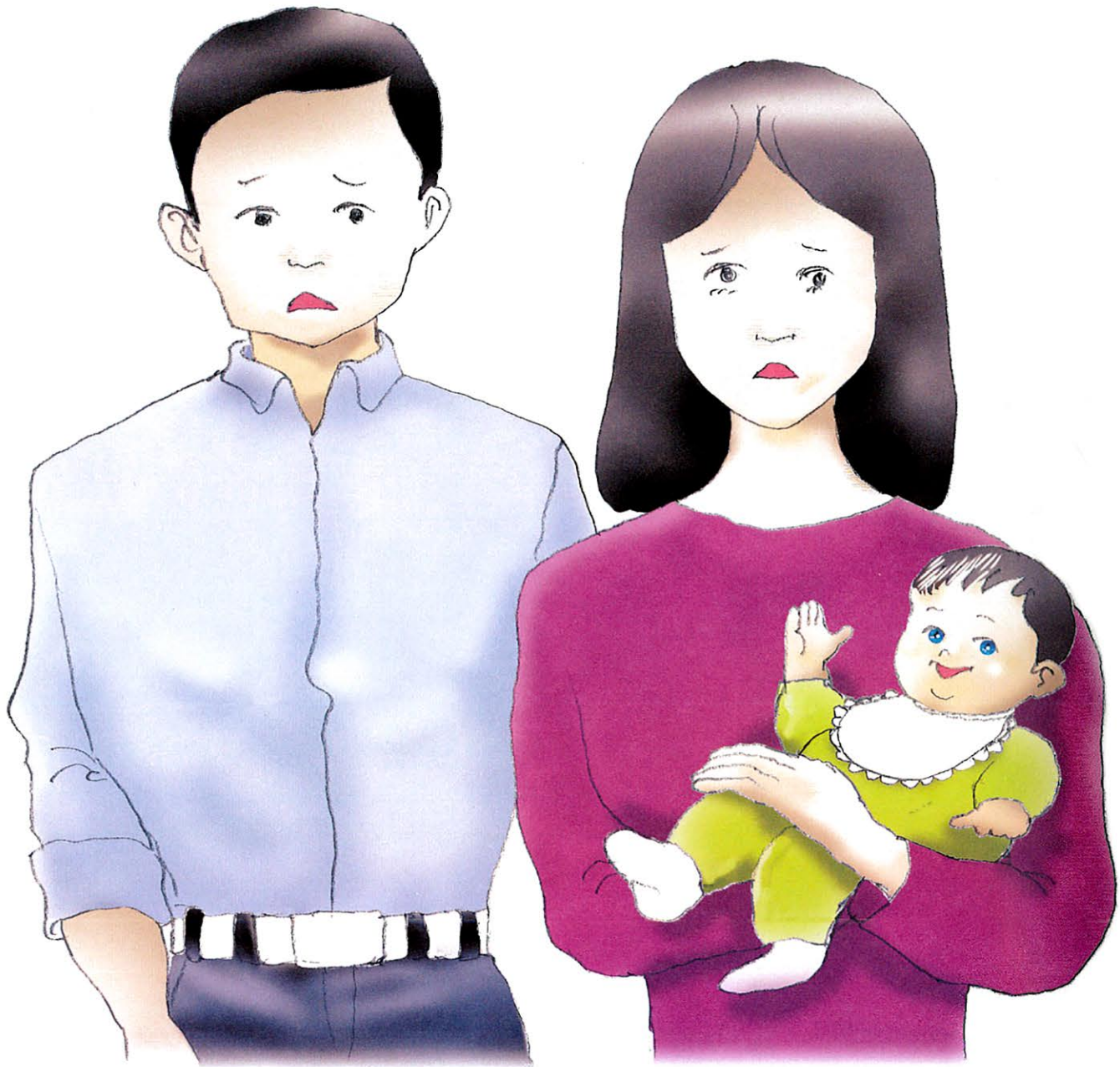
医師からの宣告せんこく

太ちゃんたいが生まれて二ヶ月たったとき、おとうさんとおかあさんは、かかりつけのお医者さんから重大な宣告せんこくを受けました。それは、太ちゃんたいが「ブールデンブルグ症候群しやうこうぐん」という、日本ではめずらしい病気にかかっているということでした。

遺伝性いでんせいの病気だということでしたが、おとうさんとおかあさん両方の家系をいくら調べてみても、いっさい心当たりはありませんでした。そして、いくつもの種類の検査をなんかいも重ねた結果、突然とつぜん変異へんいによるものであると診断されたのです。

でも、驚くことはそればかりではありませんでした。なんと、この病気にかかった子供の二五%は難聴なんちやうになる、というのです。

おとうさんとおかあさん、とくにおかあさんのうけた衝撃しやうげきは大きく、しばらくのあいだ床とこに伏すという日々がつづいたのでした。



転勤の辞令

おとうさんとおかあさんは天を仰いで祈りました。

「どうぞこの子をお助けください」

一生懸命祈りましたが、願いは天にとどきませんでした。太ちゃん
の右耳は全く聴こえず、左耳も耳のそばを電車が通ったくらいの
音の高さしか聞こえない、重度の難聴だったのです。

「この子はいったいどうなるのだろう」

おとうさんとおかあさんは、太ちゃんの将来のことを考え、暗い
思いに沈んでいくのでした。

太ちゃんが生まれて五ヶ月たったとき、またまた大変なことが起
こりました。おとうさんに仙台への転勤の辞令がおりたのです。

辞令

〇〇〇〇営業第一課
〇〇〇〇 殿

平成〇年〇月〇日付けで、
〇〇勤務を命じます。

昭和〇年〇月〇日

株式会社〇〇〇〇
代表取締役 〇〇〇〇

誰も知っている人のいない仙台……。太ちゃんを連れていっても
大丈夫だろうか……。太ちゃんとおかあさんを残して、おとうさん
だけ単身赴任をしたほうがいいのか……。
いろいろ悩んだあげく、おとうさんとおかあさんは心に決めたの
でした。家族は離れて暮らしてはいけない、と。どんなことがあつ
ても、二人が共にそばにいて力を合わせ、太ちゃんを守り育ててい
こう、と。

そして、おとうさんとおかあさんと太ちゃんは、見知らぬ土地・
仙台へと向かったのです。

三好彰医師

東京のお医者さんが紹介状を書いてくれたのは、大学病院でも大病院でもない、普通の街の医院である「三好耳鼻科医院」の三好彰医師でした。

おとうさんとおかあさんは、太ちゃんを抱いて「三好耳鼻科医院」（現在は「三好耳鼻咽喉科クリニック」）を訪ねました。



三好彰医師は、優しい笑顔で三人を迎え入れ、太ちゃんをひととおり診察すると、すぐにその場で、おとうさんとおかあさんの目の前で、受話器をとってある所に電話をかけました。そして、相手に太ちゃん親子のことを丁寧に説明し、「くれぐれもよろしく」と頼んでくださったあとで、おとうさんとおかあさんのほうを向いてきつぱりと言ったのです。

「お子さんを立派な社会人に育て上げるまで、私はご両親様と一緒に歩んでいきたいと思います。共に力を合わせ、努力して参りましょう」

難聴児を持つ親の会

三好彰医師が電話をかけてくれた相手は、「宮城県難聴児を持つ親の会」というところでした。知っている人が誰もいないこの仙台で、ただでさえひっこみがちになる難聴児親子のために、耳鼻咽喉科医師としての三好彰医師がとった最初の行動でした。そして、「共に力を合わせ、努力して参りましょう」と語りかけ、心細い思いをしているであろう親子三人にそっと寄り添ったのです。

太ちゃんとおとうさんとおかあさんは、この三好彰医師や「宮城県難聴児を持つ親の会」の人たちとの触れ合いの中で、次第に仙台という土地に慣れ、その仙台を好きになり、そして仙台の人たちとの心の交流を深めながら、未来に立ち向かう勇気と自信を身につけていったのでした。



スイミングスクール

おとうさんとおかあさんは、三好^{みやし}彰^{あきら}医師と相談して太ちゃんをスイミングスクールに通わせることにしました。水泳を通じて太ちゃんの運動機能を刺激すること、そして友だちを作るなどが目的でした。

太ちゃんは最初から水を恐れるようなことはなく、ヘルパーを両腕にはめて水に浮かび、ばしゃばしゃ泳ぐまねをして喜んでいました。



そのうちに、おかあさんと手をつないで、一、二の三でもぐること、そして水の中で眼をあけること、ヘルパーなしで泳ぎ、おかあさんの胸めがけて進むこと、などを順々におぼえていきました。

いも煮会

秋になると、仙台の人たちは広瀬川のほとりで「いも煮会」をして楽しめます。太ちゃんも、おとうさん、おかあさんといっしょに、「宮城県難聴児を持つ親の会」の「いも煮会」に参加しました。

里いもと豚肉をみそ味で料理するのです。河原になべをもちこんで、そこで煮て、みんなで丸く輪をつくって坐り、食べるのです。

楽しい楽しい「いも煮会」です。そして、そのみんなの輪の中で、太ちゃんはいちばんの「人気者」なのでした。



かっぱの太ちゃん

太ちゃんの水泳の腕はみるみる上達し、水の中にもぐって泳いだり、スタート台から勢いよくとびこんだりすることまでできるようになりました。

難聴児に足りないといわれる平衡感覚も水泳によって養うことができ、高いところからとびおろしたり、狭いへいの上を歩いたりすることもできるようになりました。



からだを思いきり動かすことを覚えたことから、適度に筋肉を使い、ほどよく疲労し、そしてそのためによく眠り、よく食べるという習慣もできました。なにより、友だちがたくさんできました。そして、みんなから「かっぱの太ちゃん」と呼ばれるようになりました。

別
れ



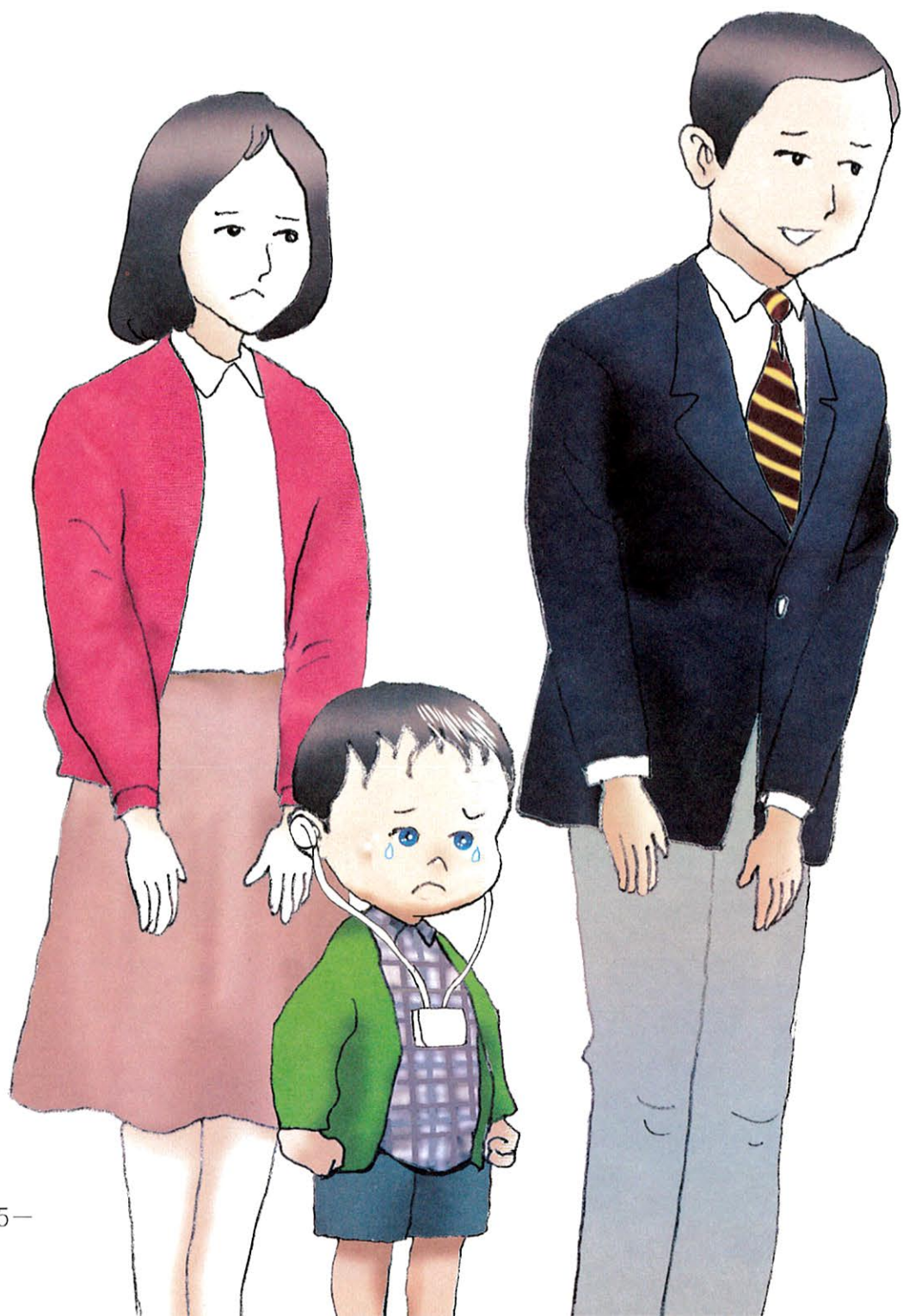
仙台に慣れ、友だちもたくさんできて、毎日楽しく暮らせるようになったと喜んでいたら、
おとうさんにまた転勤の辞令がおりました。東京に戻らなければならなくなったのです。

三好彰みよしあきら医師とも別れなければならなくなりました。

別れの日、

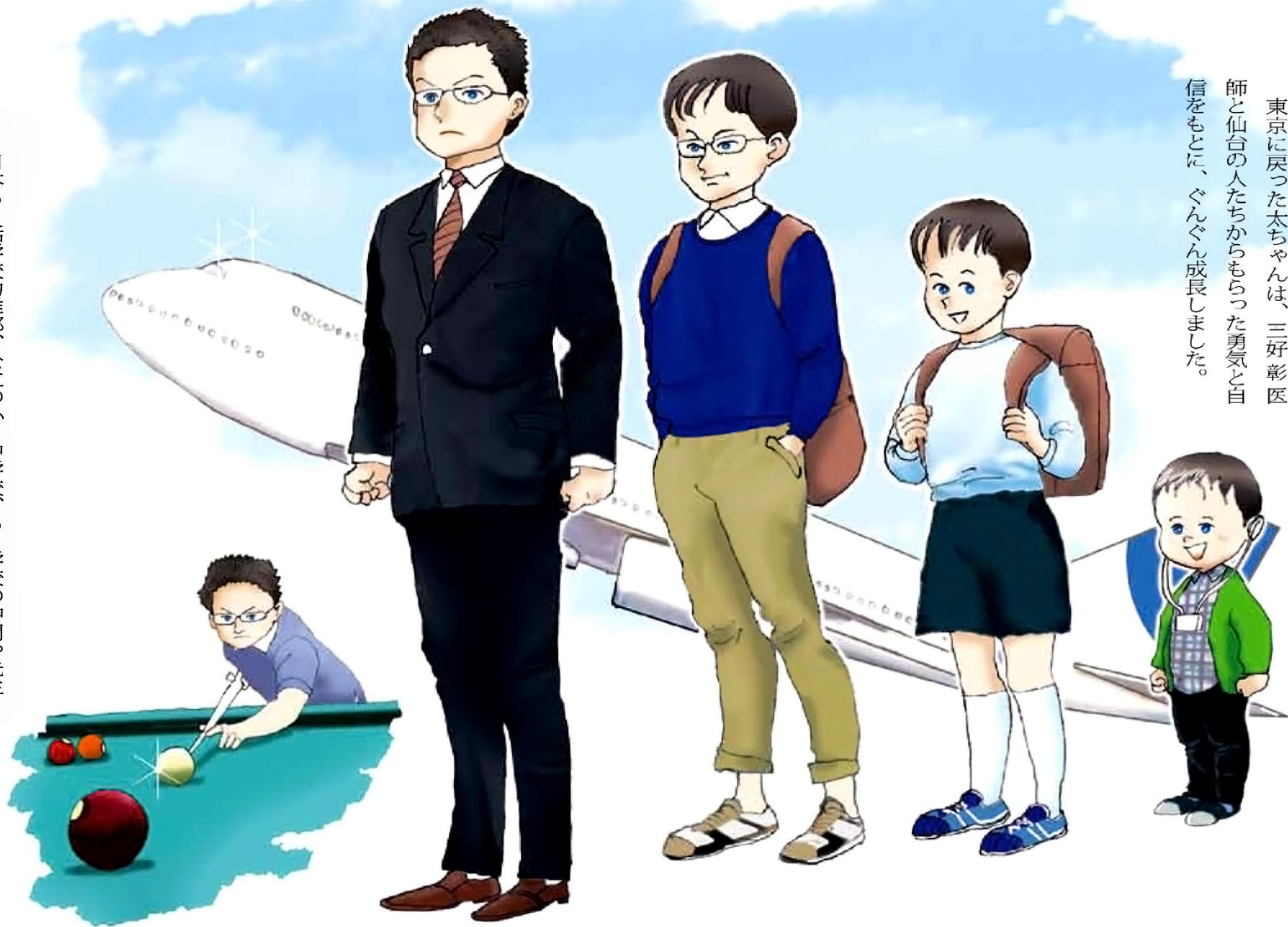
「ミヨシセンター……」

太ちゃんたいの青い両の眼から大粒の涙があふれ出て、丸くかわいらしいほほをぬらしたので
した。



立派な社会人

東京に戻った太ちゃんは、三好彰^{みよしあきら}医師と仙台の人たちからもらった勇氣と自信をもとに、ぐんぐん成長しました。



日本ろう話学校幼稚部、公立の小・中学校、ろう学校の仲間や先生方にも恵まれ、人間教育で有名な和光大学の人間関係学部に入學、卒業。そして、念願の旅行会社に見事入社を果^はたし、世界にはばたく人々を世話して毎日元気に働いています。



再び一通の手紙

二〇一二年三月二日、あの日からちょうど一年が経ちました。仙台市泉区泉中央にある「三好耳鼻咽喉科クリニック」では、地震で亡くなった人たちに黙とうを捧げていました。そこへ一通の速達郵便が届きました。東京の太ちゃんからでした。

院長の三好彰医師が、スタッフのみんなにその手紙を読み上げました。「ぼくの今日あるのは、仙台の皆さんの「思いあい、援けあい」のおかげです。地震から一年、皆さんはまだまだ大変な困難の中におられることと存じます。



でも、皆さんはあの「思いあい、援けあいの心」で、きっと素晴らしい仙台を創り上げてくださるだろうと、ぼくは信じています。

三好先生、三好耳鼻咽喉科クリニックの皆さん、ぼくは信じています

でも、皆さんはあの「思いあい、援けあいの心」で、きっと素晴らしい仙台を創り上げてくださるだろうと、ぼくは信じています。

三好先生、三好耳鼻咽喉科クリニックの皆さん、ぼくは信じています



● 生まれてから二歳頃までの間に耳からの情報が入らない状態が続くと、人が言語を獲得し「聞いて話すコミュニケーションの力」を伸ばすのに最も適した大切な時期を逃してしまふこととなります。そのような重度な難聴の子どもが日本では毎年約一〇〇〇人生まれています。彼らのほとんどは医学的に聴力を回復させることを諦めなければならぬ「重度感音性難聴」と言われるものです。耳鼻科医から「残念ながらもう病院でこれ以上治療できることはありません」と宣告された親は、だれもがショックを受け生きる望みを失います。一九八四年(昭和五九年)に北野家に誕生した太造君もその中の一人でした。

● 我が子の耳はもはや聞こえないと知った親や家族は、必死に次の救いを求め療育機関や教育機関などを訪ね回りますが、明確な答えが得られないままさらに混乱と悩みが加わることとなります。今から三〇年ほど前、太造君の幼小児期にあたる一九八〇年代の日本では、難聴の診断後の医療から教育へのスムーズな橋渡しや、一人ひとりの子どもに合った教育方法や学校を選択することが、現在のように適えられなかった時代でした。そんな困難な状況が重なる中であって、北野家の家族が三好耳鼻咽喉科クリニック院長の三好彰先生に巡

り会えたことは何という幸いでしょう。その後も互いに影響を受けあつて成長できたことは、「コミュニケーションの医療」を標榜され実践されてきた三好先生にとっても貴重な喜びであるにちがいありません。難聴児の「育ち方・学び方・生き方」を大きく左右することとして、どんな先生に遭遇したかという要件があげられます。心のつながりが感じられる初めての専門家にいかに早く出会えるかということです。太造君は成長していく過程でさまざまな選択の迷いを乗り越えてきたのです。当時、難聴者には適さないと考えられていた水泳の選択もそうでした。聾学校か通常の学校かの進路選択、大学進学への選択もそうでした。大事な時々に三好先生のような伴走者とつながっていました。

● 聞こえの不自由さは一般に外からはなかなか見えにくく理解されにくいものです。古来中国でつくられた「目」の付いた漢字は、「見る」「視る」「覽る」「看る」「督る」、そして「観る」(目の前になくとも心でみえる)など一八七もありました。今ではその中の多くが使われなくなつたのですが、それでも相当な数です。一方、「耳」の付いた「きく」の漢字にも、「何となくきく」という「聞へ」(hear)から、「注意してきく」という意味の「聴く」(listen to)、「目的

を持った聞き方)までいろいろありますが、それでもたった一三漢字しかないのだそうです。「きく」漢字が「みる」漢字に比べて圧倒的にその数が少ないことから、一般に「聞こえること・聞こえなくなること」への関心は、「見えること・見えなくなること」に比べて薄く、難聴は他の障害に比べても正しく理解されにくいことがわかります。

● 難聴はそれ自体に「痛み」というものがあるわけではなく、問題はその難聴者を取り巻く社会・環境との関わりにより「聞こえの痛み」が増すことにあります。周囲に難聴についてよく理解の出来る人がいればいるほどこの痛みが少なくて済みますし、反対に理解されにくい社会環境があれば思つた以上にその痛みがひどくなります。耳鼻科専門医(補聴器相談医)、言語聴覚士、聴覚障害教育の教師、補聴器技能者、手話通訳者、要約筆記者などはその痛みを「治す」専門家です。一方、聞こえの痛みを「和らげる」人々が難聴者の周囲に増えることが大事です。

● そのような社会・環境を創るのには、難聴者としての育ち方・学び方・生き方を一番よく知っている難聴者本人、親や親の会の組織などの果たす役割が非常に大きいのです。その意味で、障害を持った当事者が「障害学」の専門家として育つ例も増えています。アメリカなどには聴覚障害の我が子を育てた後に、もう一度大学に入り直してオーディオロジスト(聴覚障害補償の専門家)や手話言語研究者などになった「親出身」の専門家も少なくありません。そのような方々は皆、難聴で生まれた我が子のおかげで素晴らしい生き方がで

きたことに誇りを持ち感謝しています。人はだれでも何らかの障害というものを持つています。その障害に自ら向きあい努力することで自分の価値を認識し自尊心ある生き方ができるのです。「かっぱの太ちゃん」と彼の育ち方・学び方・生き方にかかわつてきた志の高い人たちは、人との「つながり」が何ものにも代えがたいことを学びとりました。

● 「目も見えない耳も聞こえない」東大教授・福島智先生が、人と直接につながつてコミュニケーションできるよになつたのは、お母さん、福島令子さんが沈黙と暗闇の中に一人置かれた我が子のために発明した「指文字」のおかげです。全盲ろうで「手触り人生」をしつかり歩んでいる福島教授が三・一一大震災の前年に発刊していた著書の題名は『生きてつて人とつながつていくことだ!』です。人とつながつていない、つながれない人間ではいくら勉強だけができて先がない。人と付き合える、人とつながつていく、その事があつてこそ意味がある。結婚しても意味がある。就職しても意味がある。それが無のまま生きようとすると挫折するのでは。人と手話でつながる。話し言葉でつながる。補聴器や人工内耳でつながる。これからも「かっぱの太ちゃん」の後輩となつて生まれ育つていく日本の難聴児たちは、情報保障の環境を改善する最新の科学技術進歩と、聞こえの痛みを治し和らげるのできる人々によるコミュニケーション環境の恩恵を受けながら、世の中との「つながり」をもつた素晴らしい活躍をしていくことでしょう。



9784900424753

ISBN978-4-900424-75-3

C0776 ¥1200E

定価：本体 1,200 円+税



1920776012009

いちい書房



かっぱの太ちゃん

二〇一二年六月二〇日 初版・発行

さく 山形三吉 ©

え コンタ・ゆうじ ©

たかはし よしひで ©

発行所 株式会社 いちい書房

東京都港区東麻布二丁目二八―六

電話〇三―三五八五―三〇一五

企画・編集 三好耳鼻咽喉科クリニック

仙台市泉区泉中央一―三四―一

印刷所 株式会社 光洋印刷

製本所 大宮製本株式会社